

むかし、あるところに、みけらんという若者がいました。みけらんは、毎日畑をたがやしたり、山でたきぎを取ったりして暮らしていました。

ある日のこと、みけらんは、村の人たちといっしょに、山仕事に行きました。

仕事が早くすんだので、みけらんは、みんなから離れて、ひとりで山奥の沼へ水を浴びに行きました。

みけらんが水に入ろうとすると、沼のほとりの松の枝に美しい着物がかかっています。みけらんは、ふしぎに思っあしもとて着物を手に取ってみました。すると、足元の水の中から、はだかの女があらわれました。女は、

「それはわたしの飛び衣ぎぬです。どうか返してください」と、手を合わせてたのみました。

みけらんがだまっていると、女は、

「わたしのたのみが分からないのですか。その飛び衣は、人間のあなたには用のない物です。どうか返してください」といいました。みけらんは、

「じゃあ、どうしておまえはこんな所にいるんだ」とききました。

「わたしは、天女です。ときどき、ここに下りて来て水浴びをするのです」

「それなら、わたしのうちに来て仲良く暮らさないか。そうしたら、わざわざ天から水を浴びに下りて来なくてもいいだろう」

みけらんがどうしても聞き入れないので、天女は、悲しみながら、みけらんについて村に行きました。ふたりは、いっしょに暮らし始めました。

それから七年がたちました。みけらんと天女のあいだには、子どもが三人生まれました。天女は、天に帰りたくて、いつも飛び衣をさがしていました。

ある日、みけらんが魚釣りに出かけているときのことです。天女は、七つになる上の子に、生まれたばかりの末っ子を背負わせ、五つになる次の子といっしょに子守をさせて、自分は水をくみに出かけました。天女が水をくんで門口まで帰って来ると、家の裏手で、子どもたちが子守唄を歌っていました。

いよい ほらほら 泣くなよ

父がもどれば 好いもんくれる

四つ柱、六つ柱、つきあけて つきあけて

粟まるき 米まるき、うしやげらに

飛び衣やら 舞いぎぬ、とってくれる

天女は、子守唄を立ち聞きして、七年のあいだ探していた飛び衣が、四つ柱、六つ柱の高倉たかくらの中にかくしてあることを知りました。そこで、高倉にはしごをかけて、とびらを開けて入って行きました。そして、粟束あわたばや米束をかき分けてみると、飛び衣が出て来ました。

天女は、飛び衣を着て、上の子を背負い、次の子をふところに抱き、末の子を右手に抱きました。それから、飛び衣のたもとを一度あおって、庭の松の木の上まで飛び上がりました。二度あおると天の半ばの雲の峰まで、三度あおると天に届きました。けれども、雲の峰から飛ぼうとしたとき、末の子を落としてしまいました。

みけらんが、魚釣りから帰って来ると、家の中はがらんとして、だれもいませんでした。そのうえ、高倉のとびらが開いたままになっていました。さがしてみると、飛び衣がなくなっていました。

ひとりになったみけらんは、あるとき、いろりに火をたきつけようとして、火吹き竹の中に折れたたんだ紙きれを見つけました。紙切れには、こう書いてありました。

「下駄千足げたせんぞく、ぞうり千足集めて埋め、そこにきん竹を植えると、三年たったら天までとどく。それを伝って天の上に乗っておいで」

みけらんは、さっそく、下駄とぞうりを集めました。下駄もぞうりも九百九十九足しか集まりませんでした。それでも、それを埋めてきん竹を植えました。きん竹は、ずんずんのびて、三年たつと、天までとどいたように見えました。みけらんは、きん竹を上って行きました。

どんどん上って行くと、あと少しというところで、竹は終わっていました。みけらんは、天に上ることができないで、きん竹の先でゆらゆらゆれていました。

天女は、いつものように、機屋はたやで機を織っていましたが、まどからふと下をのぞくと、きん竹が、天までとどくほどのびて来て、風にゆれていました。見ると、きん竹の先に、けし粒ほどの男がしがみついています。天女は、機織りの杼ひを取り出して、みけらんの頭の上につり下げました。みけらんは、杼につかまって天に上りました。

天では、天女の母神ははがみは、みけらんに親切でしたが、父神は、みけらんに難しい仕事をいいつけました。

「千丁歩ちようぶの山を、一日で切り開いて来い」

みけらんが、これは一日で終わる仕事ではないと困っていると、天女がそっといいました。

「山に行つて、木を三本だけ切りたおして、その切株きりかぶをまくらにして眠つていなさい」

つぎの日、みけらんは、山に行つて、木を三本切りたおして、切株をまくらにして眠りました。しばらくして目を覚ますと、千丁歩の山の木がぜんぶ切りたおされていきました。みけらんがもどつて来て父神に、

「千丁歩の山を切り開きました」というと、父神は、

「では、その千丁歩の山を、一日ですっかりたがやして来い」といいつけました。みけらんが困っていると、天女がそっといいました。

「千丁歩の山へ行つたら、くわで三度、土を掘り起こして、そのくわの先をまくらにして眠つていなさい」

つぎの日、みけらんは、山に行つて、くわで三度、土を掘り起こし、くわの先をまくらにして眠りました。しばらくして目を覚ますと、山はすっかりたがやされて畑になっていきました。みけらんが帰つて来ると、父神は、

「では、その千丁歩の山の畑に、うりの種を、一日でまいて来い」といいつけました。

みけらんが、これは一日で終わる仕事ではないと困っていると、天女がそっといいました。

「畑の三つの端はしに、ひとつぶずつ種をまいて、眠つていなさい」

つぎの日、みけらんは、山に行つて、畑の三つの端にひとつぶずつ種をまいて、眠りました。しばらくして目を覚ますと、千丁歩の畑一面に種がまかれました。みけらんが、もうこれで仕事は終わりだろうと思つて帰つて来ると、父神が、

「では、あした、そのうりを残らず取り入れてこい」といいました。みけらんは、きょうまいた種が、ひと晩のうちに花がさいて実になるはずがないと、困つてしまいました。すると、天女がそっといいました。

「うりはもう実っているから、あした畑に行つて、うりを三つ取つてまくらにして眠つていなさい」

つぎの日、みけらんが畑に行くと、一面にうりが実っていました。そこで、三つだけ取つて、まくらにして眠りました。目を覚ますと、うりの取り入れはぜんぶ終わつてい

ました。

みけらんが帰って来ると、父神は、ようやくよるこんで、うりがとれたお祝いをしようといいました。天女は、そつと、みけらんに、

「父はあなたに、うりをたてに切るようにとうでしよう。けれども、けつしてたてに切つてはいけません。横に切るんですよ」といいました。

父神は、みけらんにうりを料理するようにいつけました。そして、

「うりを三つ、たてに切つて、その上にあおむけに眠っているとよい。そうすれば、眠っているあいだに、料理ができるだろう」といいました。

みけらんは、天女が合図しているのに、父神のいうとおり、うりをたてに切りました。

たちまち、山のように積み重ねてあつたうりが、残らずたてにさけて、大水があふれ出しました。みけらんは、水に押し流されてしまいました。

そのときうりから流れ出た大水が、天の川です。みけらんは、犬飼^{いぬか}い星になり、天女は織姫^{おりひめ}星になって、天の川のあちらの岸とこちらの岸でかがやいています。みけらんが流されたのは、七月七日でした。そのときから、毎年七月七日には、みけらんと天女が会うことができるのだということです。

村上郁 再話

資料『旅と伝説1―1―12』